

【調査報告】

まちの“見せ方”と“ひと”
—福井・金沢の地域リソース調査報告—

渡川 智子、種村 文孝、芝 涼香

The People and Their “Presentation” of the City;
A Report of Local Resources in Fukui and Kanazawa

WATARIKAWA, Tomoko & TANEMURA, Fumitaka & SHIBA, Suzuka

1 福井・金沢調査の概要

2014年9月、3日間の福井・金沢調査を実施した。石川県・金沢市ではひがし茶屋街、近江町市場、兼六園、金沢21世紀美術館を、福井県では、福井大学(学会参加)、福井市内散策、恐竜博物館を巡った。この調査では、京北町プロジェクトへ活かすことを目的として、街に訪れる県外旅行者の視点を持ち、地域リソースに注目しながらさまざまな角度から街を堪能した。本調査報告は、調査者のうち、3名の院生の報告・考察を取り上げていく。

2 福井・金沢の“見せ方”と“ひと”

2-1. 金沢調査

◆見せ方への工夫

加賀藩前田家の拠点として発展してきた金沢では、京都や江戸から数多くの名工を招き、質の高い伝統工芸や文化が発展してきた。歴史的なまちなみの景観の中には、職人工房やショップが多数みられ、また街なかには伝統工芸館、資料館が点在するなど、伝統工芸、伝統芸能や食文化は、金沢の街を大いに彩っていた。特筆すべきは、このような街固有の文化、特色の“見せ方”である。以下、簡単に列挙したい。

<玄関口、金沢駅>

街の玄関口である金沢駅には、駅校舎を抜けると巨大なガラス屋根で覆われた空間がある。これは「もてなしドーム」と呼ばれ、雨や雪の多い金沢で、駅を降りた人に傘を差し出す、もてなしの心を表現する大きな傘をイメージしている。さらにその正面にそびえ立つ木で造

られた壮大な門「鼓門」は、金沢の伝統である加賀宝生の鼓をイメージした2脚の柱に、局面を描く屋根をかけたものである。これは伝統と革新が共存する街をイメージして作られているようだ。これらは金沢の新しいシンボルとしても親しまれている。

<配布マップ>

そして駅構内や案内所で配布されている観光マップやしおりは、街の特色が非常に魅力的にまとめられており、いくつもある散策ルートから、自分が特に気に入ったルートを選ぶことができる。街中をめぐる交通手段も充実しており、「城下まち金沢周遊バス」など観光用のバスも数多く運行している。昔懐かしい復刻バスも運行するなど、分かりやすく、さらに楽しみながら移動できる。金沢駅、そして街中のいたるところから、文化、芸能、工芸を“みせる”工夫が、本当に徹底されていたことが印象に残った。

◆ホスピタリティ ～まいどさん・街歩きの工夫～



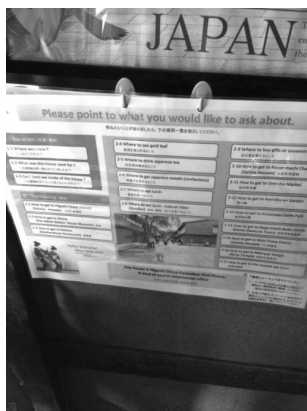
さまざまなリソースの特徴的なデザイン(見せ方)に加え、観光客へのホスピタリティも本当に行き届いていたと感じる。最初に訪れたひがし茶屋街では、観光ボランティアガイド“まいどさん”が、街についてさまざまなお話を聞かせてくださった。“まいどさん”は、金沢弁で「こんにちは」という意味に近い言葉であるようだ。まいどさんには金沢市内の各名所で会うことができる。

“まいどさん”から話をうかがっている様子

さらに目を引いたのが、各観光名所にある、置き傘 MAP、外国人観光客用の指差し英語シート、たばこマナーの喚起ポスターなどである。



置き傘マップ



外国人観光客用指差しシート



かなざわたばこマナーのポスター

このように、街歩きをより過ごしやすくするための工夫が、そっと添えられていることがとても印象に残った。あらゆる人を街に迎えるおもてなしの心を感じると共に、受け入れ側も訪れる側も、両者が共に楽しく快適な時間となるような温かい工夫であるように思えた。

2-2. 福井調査

福井の街で過ごすなかで非常に印象的だったのは、“人”を介したおもてなしの心であった。ここではえちぜん鉄道のアテンダントに絞って簡単に報告したい。

◆ “人”を介したおもてなし — えちぜん鉄道・車内アテンダント

私たちは恐竜博物館へ行くために、えちぜん鉄道を始点（福井駅）から終点（勝山駅）まで利用した。出発直前の電車にあわてながら乗り込む際、ホームで真っ先に目に入ったのが、明るい笑顔で迎えてくれる車内アテンダントさんの存在であった。出発した電車のなかでアテンドさんはアナンスを始める。さらに、「お困りのことがあれば何でもお知らせください」と優しい笑顔で呼びかけた。その後も車内を見回りながら、観光客とみられるお客さんには、降車駅の案内やバス時刻表を渡したり、高齢の方の乗下車を手伝ったりと、アテンダントさんみずから積極的にお客さんに声かけをし、乗車客とコミュニケーションを取っていた。アテンダントさんから声かけしてもらうと、乗車しているお客さんも色々と質問しやすくなるようだ。おそらく県外から来たであろう女性グループは、車内の窓から見える不思議な建物について、「あれは一体何ですか？」とアテンダントさんに質問し、アテンドさんと楽しそうに会話を繰り返していた。

切符販売や両替をしてくれる車掌さんが常に車内を歩きまわっている路線は地元（福岡県）にもあるが、車掌さんの笑顔や世間話をしている様子をみた記憶はほとんど無い。毎日同じ言葉を呪文のように繰り返しながら、乗車客相手に自分の業務を淡々とこなしている。しかしそれは自分にとっては当たり前で、えちぜん鉄道の車内を明るく優しく歩き回るアテンドさんに、正直とても衝撃をうけた。乗車客も少なかったため、アテンドさんについて詳しく知るために実際に少し話を伺ってみた。

話を聞いたアテンドさんは地元生まれの方で、数年前にえちぜん鉄道に就職された方だっ

た。車内アテンドは8時半から5時の電車に乗車しているようだ。アテンドさんはみなさん鉄道の社員さんであり、えちぜん鉄道に入社してから研修が行われるという。主な業務としては車内の見回り、お客さんへの声かけ、乗下車の手伝い、観光の案内、土産物・切符の販売などを行っているようである。勤務中にも関わらず私たちの質問に本当に丁寧に応答してくださり、「就職きまってなかったら、ぜひえちぜん鉄道のアテンダントに！」との優しい声かけもいただいた。

えちぜん鉄道のアテンドさんは、自らの経験とお客さんから発せられる様々な振る舞いのもとに、その時々に見合った声かけ、行動を行っていた。最低限のマニュアルはあるかもしれないが、マニュアルを超えたホスピタリティを、アテンドさんの声、笑顔、振る舞いから多く感じることができた。8時半から5時という時間には、通勤・通学をする学生・社会人はおそらく多くは乗っていないだろう。この時間帯に乗車するのは、地元の方、高齢者の方、そして私たちのように地理に詳しくない観光客である。それぞれのニーズを素早く察知しながら、やさしく声かけしてくれるアテンドさんの存在は、観光客だけでなく、毎日利用する乗車客にとっても本当に安心の存在であると思う。大阪の無人モノレールに乗車した時に感じた「このまま機械が暴走してとんでもない所に連れていかれるのではないだろうか」というそこはかたない不安な時間とは対極にある、「なんだか明るい気持ちになったな」という温かい時間を過ごすことができた。

2-3. 京北への示唆

京北への示唆として得た気づきは、まず、街にあるもの、特色をどう“見せるのか”という点である。デザイン(印刷物だけでなく、街のしくみ自体の)が人にもたらす作用はやはりとても大きいことを感じた。また街歩きに導入されていた工夫(ボランティア、マナーポスター、置き傘マップ、指差し英語ガイドなど)は、絶対に必要ではないかもしれないけれど、導入することで、街に住む人、直接観光客と接する人、観光客の人、誰もがみんなハッピーになれる仕掛けであると感じる。地域の活性化を目指すにあたり、まちの人が楽しくなり、新しい視点を得られることは何よりも重視しなければならない。それが街の外の人にとっても楽しいものであれば、その仕組みはさらに発展していくだろう。

つぎに、“人”である。“人”を介することでしか得られないことは多く存在する。えちぜん鉄道のアテンダントは、利用客にほっとする安心と温かくなる時間を、押しつけがましくない形で注いでくれていた。さらに“人”柄の違いによって、そこから広がっていく温かさやコミュニケーションの形は全く多様になるだろう。“人”を媒介とした活動は京北を始め、どこの地域でもおそらく多く取り組んでいると思われる。しかし、人を介することでしか得られないこと、コミュニケーションの重要性を再確認し、それぞれの活動にさまざまな“人”をどれだけ生かすことができているか、いま一度検討することは大きな意味を持つように思った。

(渡川智子)

3 福井・金沢の資源を活かす“ひと”

3-1. 金沢のまちづくり

金沢のまちづくりの調査として、市内のひがし茶屋街、近江町市場、兼六園、21 世紀美術館を見学した。金沢市は金沢駅前のモニュメント、バスの整備など、街全体としてコンセプトを整えてまちづくりを進めてきたことが伺え、デザイン性の強さや景観などもおしゃれな観光地を意識しているように感じた。

ひがし茶屋街では、ひがし茶屋休憩所でボランティアの方から、茶屋街の建物やまちづくりの説明をお伺いした。伝統的な障子の貼り方の石垣張りをすると、それだけで 10 万円の費用がかかってしまうため、普通の住居ではもう用いられていないという。そのため、そのような技術の習得がなされなくなってしまうため、職人大学校をつくり、技術継承をしているとのことであった。観光客に説明をするボランティアの方も、講座を受けて育成がなされており、観光ボランティアガイドまいどさんという共通の上着を着て、誰がボランティアかわかりやすくなっていた。外国人の観光客にも英語で説明をしており、語学ができるということも大事な点だと感じた。また重要文化財である茶屋建築の志摩でも、建物内で説明をされる方がいて、歴史や文化を解説していただいた。

21 世紀美術館でも、来館者に対してボランティアの方が取り組みを説明したり、一緒に触れ合う場を設けていた。無料で閲覧できる場所もあり、タレルの部屋や、屋外にある体験型の作品など、アートを身近に感じさせるものがあった。堅苦しいものではなく、身近に感じてもらえるような取り組み、間口を広げようとする取り組みがなされているといえる。

主に、ひがし茶屋街と 21 世紀美術館を取り上げたが、ここから感じたことは、ボランティアの力の大きさである。歴史や伝統、文化、アートなどについては、説明を聞かなければわからないことが多かったといえる。なんとなく素通りしてしまったり、見逃してしまうようなポイントも多く、価値や意味を説明してくださるボランティアの方の影響は大きいといえる。訪れたのは金曜日であり、平日であったが、そのような日でもボランティアがいて、しっかり説明できる体勢が整っているというのは、観光を促す上では重要なことであると考え

3-2. 福井のまちづくり

福井で印象的であったのは、恐竜博物館と路面電車である。金沢とは対照的に、街全体としては、あまりつくりこまれていない感じを受けた。福井県としては、東尋坊、永平寺、恐竜博物館を三大観光スポットと位置づけているが、実際に訪問するまで、恐竜博物館に対してはあまりイメージがなかった。これは、対外的な情報発信の不足も考えられる。こうした観光資源への県外の人々の認知度も、決して高くないような印象がある。

福井駅前には、恐竜のオブジェを作成中であると、旅館の主人から話を伺った。これは、恐竜王国としての認識を高めるためである。福井では恐竜の化石の発掘数が多いということ

だが、これは、福井という土地で化石を発見しやすいというよりも、福井県が化石発掘のために長年予算をかけて取り組んできた影響が大きいとのことであった。実際に恐竜博物館を訪れてみると、子どもから研究者まで楽しめる要素がたくさんあり、魅力的な博物館となっていた。化石の展示や解説、映像展示の充実など、館内をじっくり観て回るだけでも数時間かかる充実度になっている。建物のつくりとしても、一周して終わりではなく、研究者のおすすめコースとして順路が提案されているだけで、どこから見ても、どのように見て回ってもよいように設計されており、好きな場所を好きなようにじっくり見て回るができるようになってきている。これは、来館者の多様なニーズにあっており、何度来てもわくわくできるのではないかと思う。また、子どもの叫び声など、高い声が反響するような建物の造りになっていて、驚きの声や笑い声などが反響して、賑やかでわくわくさせ、好奇心をくすぐるように感じた。静かに見てまわるのではなく、驚きの声や来館者どうしの会話などもいたるところで見られた。他に、化石の発掘体験があったり、化石のクリーニング作業を見学できたりと、研究の奥深さにも触れられるコーナーがあったのもよかったといえる。

福井の路面電車は、最新型の車両もあれば、旧型の車両もあり、これも観光資源になっているとのことであった。電車マニアが訪れ、最新型の車両にも、旧型の車両にも乗るとのことで、交通の便だけではなく、そのようなニーズにも応えていると考えられる。

福井の観光資源というのは、対外的にはまだまだ知られていないのではないかというのが、今回訪れてみての感想であった。恐竜博物館にしても、路面電車にしても、認知度が低いと考えられる。旅館のご主人から、恐竜の発掘に力をいれていることや、路面電車の魅力をお伺いして、初めて認識できたことも多かった。

3-3. まとめ

金沢と福井の訪問から考えたことは、地域の資源を説明できる人の重要性である。金沢では、休憩所のボランティアの方から、福井では旅館のご主人からお話をお伺いして、その地域の観光資源を知ることができた。それは、旅行パンフレットで得られる情報と違って、生の声だから伝わるものがあつたと思う。外部の観光客が訪れたとき、何気なく見過ごしてしまう部分や、その地域の歴史、知恵、文化などを、説明されるかされないかによって、得られる経験が異なったものになってくる。外部の目だから発見できる地域リソースがあるのと同時に、やはり、その地域で積み重ねられてきた地域リソースを説明できるかというのは重要なことだと感じた。その魅力を自覚しているか、言語化できるか、そのような人材がどれくらいいるか、そのような人材を育てているかは、大切なことである。そのため、金沢の職人大学校やボランティア育成の取り組みは重要であろう。京北地域のまちづくりにおいても、その地域の魅力を語る人を増やすことが大切であると考えられる。その地域の歴史や文化、自然などを、外部から訪れた人に説明できるかどうかは重要である。また、その際には、地域へのアイデンティティや愛着というのも大きく関わってくる。金沢のボランティアも、福井の旅館のご主人も、地域へのアイデンティティを強く感じていたからこそ、魅力を生き生きと語ってくださったのだと思う。魅力を認識すること、そして、それを語ること、これがな

くては、まちづくりというのは効果的ではないと感じた。

(種村文孝)

4 まちづくりと博物館

2014 年 9 月 26 日から 3 日間、金沢と福井にて現地調査を行った。ここではまちづくちと博物館という観点で金沢 21 世紀美術館について報告する。

金沢 21 世紀美術館は「新しい文化の創造」と「新たなまちの賑わいの創出」を目的として 2004 年にオープンした美術館である。金沢城公園や兼六園からも近く、観光客が来館しやすい場所にあるが、同時に地元の人々が憩う場でもある。

今回の調査では、金沢 21 世紀美術館の特徴が「来館者が参加する」点であることに気が付いた。驚くべきことに私は館を入れてから、出るまでの間ほとんどの時間を人と話して過ごしていた。しかも共に来館した人ではなく、美術館で初めて会う人と話していたのだ。例えば、訪問時にデザインギャラリーにて開催されていた「鈴木康広「見立て」の実験室」(2014 年 9 月 13 日(土)-2014 年 11 月 24 日(月)) ではボランティアの研究員が常駐していた。アーティストである鈴木康広がデザイン、制作した作品がギャラリー内に展示されている。鈴木康広は常にその空間にはいないが、鈴木康広とともに事前プログラムに参加し、ともに活動した研究員が来館者に **Some tips** を与える役割を果たしている。部屋の隅には小さくて丸い緑のコマが飾られていた。研究員に促されてコマを回してみるとコマが逆さになる。この状態で見るとまるで丸い形の木のように見える。一つ回すとコマは木になり、二つ回すと林、三つ回すと森…といった具合に、鈴木康広の「見立て」のアイデアに来館者は楽しみながら触れることができる。また、数字のパネルを使って漢字を作ることができるだろうか、と他の来館者と頭をひねりながら考えるといった場面もあった。

私にこれらの情報や楽しみを与えてくれた研究員は地元の主婦だった。去年別のボランティアに参加し、それがきっかけで研究員になってみようと思ったそうだ。「私も今回の活動をきっかけに鈴木さんのことを初めて知ったけれど、いろんな人と話す活動は楽しい」と語っていた。研究員は地元の人や京都の人が参加しており、シフトを組んで活動しているようだ。

他の空間でも「粟津潔、マクリヒロゲル 1 美術が野を走る:粟津潔とパフォーマンス」(2014 年 9 月 13 日(土) - 2014 年 10 月 13 日(月)) の部屋では粟津の作品の展示のみならず、現代アーティストが作品制作を行っていた。生身のアーティストと会話をする機会は一般の来館者にとっては多くないが、ここでは気軽に話しかけることができる。もちろん参加アーティストの雰囲気や性格なども館によって考慮されているはずだ。「普段は名古屋に住んでいるんだ」とギターを片手に語るアーティストと美術館で話すなど、通常は中々経験できないが、ここでは自然に楽しめるから驚きだ。

このように金沢 21 世紀美術館では人的リソースを積極的に取り入れ、活用している。研究員やアーティストを呼べる背景には便利な交通網があげられるだろう。だが、こうした初

めて会う人との出会いを創出している点は京北にも参考になるのではないだろうか。京北の人的リソースをどのように活用していくか、それは誰にとって魅力的であるべきかは今後の課題である。

(芝 涼香)



写真左：「鈴木康広「見立て」の実験室」の様子、右：数字で鯨の形をつくってみる「見立て」



館内には親子で休めるキッズスタジオも完備している。